

さわや書店で働くこと

日常的に使うトイレットペーパーにも、それを補充した誰かがいる。

そのことをあまり意識せずに僕らは生きている。しかし用を足した後、紙がないという重大な危機に、私たちが直面する可能性はつねにある。

もしその状況がおとずれたら、トイレットペーパーを補充してくれている人がいることを、普段は当たり前のこととして意識の外側へと追いやっていた自分の傲慢さを棚上げし、「ついてない」とか「どうして自分が」とか、マイナスの感情が胸の内を占めるかもしれない。そしてその感情が去った後に、紙のないこの状況を受け入れ、次に自分がどういう行動を取るべきかを考えなければならぬ。

助けを呼べば誰かが来てくれたり、何かしらの偶発的な出来事によって状況が好転したり、おばあちゃんが教えてくれたトイレの女神様に出会えたりといった奇跡が起こるのは、映画やドラマや歌のなかだけの話だ。だから私たちは、ほとんどの場合ギリギリの状況下に追い込まれてはじめて何ができるのかを考える。時にその窮地を脱するために、何かを犠牲にしなければならぬこともある。

そんな危機的な状況に追い込まれる前に、「何ができるか」を想像する時間はいくらでもあったにもかかわらず、私たちは「もしも」に對する備えを怠っている。備えていれば存在しなかった犠牲を悔やみ、自らの怠惰と想像力の欠如を棚あげにして、受け止めきれなかった感情の矛先を、他の理由へと向けることで自分の責任を転嫁しがちだ。

その向けられた矛先。トイレットペーパーを使い切ってしまった誰か、交換用のトイレットペーパーを補充しなかった清掃係、ましてやいつまでも姿を現さないトイレの女神様に毒づくといったことは、まったくもってお門違いである。

ここで、少しだけ時間を戻して考えてみたい。

トイレットペーパーを使い切った直前の誰か。それがもし自分だったら――。

密室である。自分はもう充分に拭いたので、と言い訳めたひとりごとを残し、紙がないことに気づきながら、補充をせずに個室を後にする。その選択をしても誰に咎められるものでもない。

トランプのババ抜きでいうところの、次の人にババを引かせる行為だ。自分の手からババが離れたことをもって、「ついていた」とか「セーフだった」と考え、あなたは「犯行現場」を後にするかもしれない。

ここで重要なのは、ババ抜きは合意のうえのゲームであるが、トイレットペーパー補充問題は両者間に合意が存在しないということだ。紙を使う側の人が圧倒的多数で、補充する側

の人が特定かつ少数であるという事実。多数派にいると考えていた自分が、突如として少数派と知らされた時の孤独といったら。

多数派、少数派については、本文でも出てくるのでここでは言及しないが、現代は多数派と少数派が簡単に入れ替わる世の中である。誰もが自分の損得に敏感で、他人の行為に対しでは不寛容。そんな空気が蔓延しているいま、他者に利益をもたらさず、自分が積極的に損をかぶる行為は特異なものともみなされるだろう。「自分さえよければよい」という感情がもたらす紙がない状況に絶望を感じて、誰かのせいにしたくもなる。

しかし、明らかに自分に非がないことに理不尽を感じ、誰かのせいにしたって人生は続くのだ。紙のない状況を積極的に受け入れ、なんとかこの窮地を脱したあかつきには、トイレットペーパーを「誰かのために」と補充する人になろう。手渡す人になろう……。

何年前か、公衆トイレで用を足した後に紙がないことに気づき、そう決意した。どうやって危機的状況を脱したかは想像にお任せするが、僕にはその状況に追い込まれたのが初めてではないという強みがあった。

いまこの本を読みはじめたあなたは「青木まりこ現象」をご存じだろうか？

本屋に行くとき便意をもよおすという現象のことだ。一九八五年、「本の雑誌」40号に青木まりこさんという一般人女性が、当該の内容を投稿したことで話題となり、この女性の名前

を現象に冠したことで話題を集めた。ご存じない方はネットで検索してみても欲しい。詳しい経緯がご覧いただける。

二〇一三年に「マイナビニュース」が行ったアンケートによると、実際にこの現象を経験したことがある人は二三パーセントとの結果が出た。お察しのとおり僕も体験者であり、個室に紙がないという状況を初体験したのは本屋のトイレであった。

物心ついてから、トイレで用を足すときには手持ちぶさただからと、個室に本を持ち込んで読んでいた。当時、わが家のトイレには僕がせっせと持ち込んだ本がう高く積んであったものだった。そのことと「青木まりこ現象」との因果関係は証明できないが、トイレットペーパーが切れたときのリスク管理を意識しての行動であったかもしれない。含みをもたせた書き方にピンをきた人もいるかもしれない。その危機を僕は「本」によってのりきった。

時は流れて、いま僕が補充するのはトイレットペーパーではなく「ブックペーパー」だ。

トイレと本との密接な結びつきが、僕を本屋へと誘ったのだろう。大学は出たけれど、働き口を得なかった僕は、実家のある盛岡市の「さわや書店」という本屋に拾ってもらい、本店で一〇年ほど勤めた後、東日本大震災を経て、上盛岡店、そしてフェザン店と渡り歩き、二〇年近くの歳月が経った。

さわや書店はその間に、『天国の本屋』（かまくら春秋社／新潮文庫）、『思考の整理学』（ちくま文庫）、『永遠の0』（太田出版／講談社文庫）、文庫Xこと『殺人犯はそこにいる』（新潮

文庫)など、数々のベストセラーを生み出して、全国的に注目される存在となった。それは、さわや書店が赤澤桂一郎社長を筆頭に、次の人のためにトイレットペーパーを補充するようにと教える職場だったからだろう。

「誰かのために」という気持ちを持たなかった僕が、人と本との出会いに恵まれて、冒頭のトイレットペーパー問題以外にも色々考えるようになった。

普段、本当に言いたいことを言うほうではないし、本屋として自分が取り組んだことを喧伝するようなこともしない。今回、縁あって心のなかを吐露する機会を与えられ、正直いつておおいに戸惑った。

この本は、同じ会社の仲間である田口幹人氏の著作『まちの本屋』(ポプラ社)のように、業界関係者への覚醒を促すような内容のものでもなければ、これまた同じ会社の後輩である長江貴士氏の『書店員X』(中央公論新社)にある実践的エピソード、また「長江の初陣だ。勝たせてやってくれ」という感動の名場面もない。

本書では格好つけることのない、僕なりの本屋の日常を綴ったつもりだ。だからその時々感情が一定ではなく、振り幅があると思うがそこはご容赦願いたい。

悲しいときほど楽しみに目を向け、苦しいときほど仲間と笑う。そんな、さわや書店での日々を嘘偽りなく記すことでしか、本書は執筆しえなかった。だから、特別ドラマティック

なことなど書かれてはいない。でも、「特別」とは普通という概念に対する相対的なものではない。むしろ、「普通」もまた特別に対する相対的な意味合いしかない。屁理屈だがそんなふうにも思う。

ここ数年のさわや書店の取り組みを知る人からは「またさわや書店の本か」と言われそう。だから、本屋に勤める店員として、直接お客さんにアドバイスを求められたらこう言う。読む優先順位でいえばきつと『まちの本屋』や『書店員X』のほうが高いと思います。本書は後回しにするべきでしょう、と。

どちらとも読みましたという方で、もしも興味本位からこの本を手にとってくれる方がいたら、トイレの場所を確認した後で、バラバラとやってみて欲しい。

「さわや書店三部作 完結編」としてお読みいただければ幸いです。

盛岡駅・上盛岡駅周辺

